

#子育て処方せん

検査特徴丁寧の説明

子どもを取り巻く病気やその治療・検査法などについて、福岡市立子ども病院の医師が解説する「#子育て処方せん」。今回は産科長の中並尚幸医師に、胎児にダウン症などの兆候がないかを調べる出生前診断について聞いた。



中並尚幸医師

出生前診断

出生前診断は、広義には心エコー検査といった胎児期に行う検査全般が含まれるが、狭い意味では、胎児に染色体異常などがないかを調べる遺伝学的検査による診断を指す。

人間の細胞に通常46本ある染色体に、数が多い、少ないなどの異常があった場合、流産や心身の発育が遅れるダウン症などの原因となる。妊婦のおなかに針を刺して羊水を採取する羊水検査などは「確定検査」と呼ばれ、ほぼ確実に診断できるが検査自体が流産のリスクを伴う。

一方、妊婦から採血して異常の有無を分析する新型出生前診断(NIPT)などは「非確定検査」と呼ばれ、安全ではあるが確実な診断とはならない。検査前には原則、妊婦とパートナーにそろってカウンセリングを受けてもらう。こうした検査ごとの特徴などを丁寧に説明し、結

果を冷静に受け止めてもらえようとしている。

の選別につながりかねないとの指摘もある。

認知度上昇 受診増える

前提とせず、「ダウン症の可能性があるなら早めに心構えをしたい」「不安なく妊娠期間を過ごしたい」などの理由で検査を受ける人もいる。

当院は小児専門医療施設でダウン症などの疾患がある子どもの診療経験が多い。疾患が判明した時には、出生後の治療や受けられるサポートなどを詳細に伝え、出産後の生活をイメージしてもらえよう心がけている。

(聞き手・大森祐輔)

「起立性調節障害」知って

自律神経の不調で立ちくらみやだるさといった症状が出る「起立性調節障害(OD)」について、医療や学校現場で早期に症状を把握し、適切な治療につなげる動きが広がっている。

福岡県久留米市の久留米大医療センターは昨年11月、小児科に登校支援外来を新設した。ODは脳や全身への血流が低下し、症状が重くなると朝に起きられないなど生活に支障が出る。同外来の患者の半数にODがみられるという。担当の山下大輔医師は「症状は個人差が大

思春期の不調 広がる対策

病院に外来新設／学校に手引周知

きく、体がきついなど困っている場合は受診してほしい」と呼びかける。

早期の治療が症状の軽減につながるため、教育現場でも取り組みが進む。岡山県教育委員会は2018年度、不登校対策に医療的観点を取り入れようと、全国に先駆けてODの対応ガイドライン(手引)を作成し、相談できる医療機関も掲載した。病気との共通理解を持った上で対応に当たることが求めている。大分、熊本両県教委も同様の手引をつくり、学校に周知している。



インタビューの動画はQRコードを読み込んでください

起立性調節障害(OD)のチェックリスト

3個以上あてはまると、ODの可能性がある

- ☐ 立ちくらみやめまいを起こしやすい
- ☐ 立っていると気持ち悪くなる
- ☐ 顔色が青白い
- ☐ 食欲不振
- ☐ 朝起きられず、午前中は調子が悪い
- ☐ 疲れやすい
- ☐ 少し動くと動悸(どうき)や息切れがする
- ☐ 乗り物に酔いやすい
- ☐ 頭痛が起こりやすい
- ☐ へその周りが痛いとき々訴える
- ☐ 入浴時や嫌なことを見聞きすると気持ち悪くなる

※熊本県教育委員会の対応ガイドラインを基に作成

ODは、思春期に多くみられ、軽症を含めると中学生の10人に1人がかかるとされる。久留米大でODの診断を受けた久留米市の男子高校生(15)は「対処の仕方がわかって前向きになれた。みんなにこの病気のことを知ってもらいたい」と話す。

ODは20歳頃までには症状が改善していくとされるが、個人差もあるという。

「#子育て処方せん」へのご意見をお寄せください。社会部のメール(s-syakal@yomiuri.com)へお願いします。

令和7年10月8日読売新聞西部本社版